

【研究ノート】

明治後半期の新聞広告と人々の楽しみ

『時事新報』に登場した芝居案内

The Advertisements of Theatrical Entertainment on Newspaper in the Late Meiji Period

風間道夫

KAZAMA, Michio

キーワード：職業人口；賃金労働；歌舞伎；翻訳劇；岡本綺堂

Received: 2015.3.11

1. はじめに

現在、我々が日々手にする新聞の原型は、明治の初期に生まれた数々の新聞だと考えられる。これらの新聞には、日々の出来事を伝えるだけでなく、その発行者、編集者にとって社会活動の一環として、政治的主張を展開する道具として使われた新聞もあった。

だが一方で、新聞には編集記事とともに、早くから各種の広告も掲載していた数々の新聞があった。新聞は報道・言論メディアであると同時に、広告メディアでもあった。

本稿は、明治期の『時事新報』に掲載された芝居広告を題材として、広告メディアとしての新聞の形成について考えたもので、拙稿「明治期における高等教育の発展と新聞広告」¹⁾、「明治中期の新聞における会社広告の登場と定着」²⁾、および『『時事新報』に登場した案内広告』³⁾に続くものである。

『時事新報』は、明治 15(1882)年に創刊され、福沢諭吉が健筆を揮い、同時に、いち早く広告に着眼し、当時、新聞広告の利用を知らなかった人々に種々の宣伝をしていた。山本武利の『近代日本の新聞読者層』⁴⁾によれば、『時事新報』は商人、商店小僧、実業家、会社銀行員などの商工読者が多く、官吏読者も多かった。株式、コメ、生糸、などの商況はもとより、内外金融、為替相場、政府の財政金融政策、経済界の動きなどを豊富に掲載した。

江戸から明治へと時代が変わった時、武士階層は崩壊し、多くは故郷に帰るなどで、東京の人口は大きく減少した。東京の人口が江戸時代の人口に戻るのは、明治 20 年代半ばである。地方の農村から新たに人々が流入し、社会階層の様子も変化した。国立銀行も増加し、商業資本が蓄積されて行った。青木宏一郎の『明治東京庶民の楽しみ』(中央公論新社)⁵⁾によれば、明治後期は日清・日露戦争の時代であり、東京の骨格をなす鉄道の整備が進み、工場が建てられ、商業の発展によって日本の富が東京に集約されていった。東京は、事業

の成功で巨万の富を得た人から困窮の極みといった人まで、様々な人が住む街となった。

2. 明治東京の各職業人口

小木新造は『東京庶民生活史研究』⁶⁾の中で、『東京府統計書』を基にして、商業・工業農業人口の比較一覧表を作成した。それが、下記の表1である。

これを見ると、明治15(1882)年から明治21(1888)年にかけては、地域による違いはあるものの、全体としては、商業人口はやや減少、工業人口は商業人口より減少幅が大きく、農業人口においては約20%へと激減している。だがその後、明治33(1900)年には、明治21(1888)年に比べて商業人口は3倍強に、工業人口は2.5倍と、ともに大きく伸びている。

さらに、『警視庁統計書』の「職工累年比較」によると、工場で働く人々の数が倍増しており、賃金労働者の増加が分かる。明治中期から後期にかけて、手工業的職人仕事から近代的機械工業まで含め、東京における生産活動は大きく変化したのである。

明治後期の東京では、職住分離が進み、給与生活者が増え、定期的に休日を取れる人が漸増して来たと言えるだろう。これらのことから、人々の娯楽の拡がりを生み出す素地が出来つつあったと考えられる

表1 明治15、21、33年の商・工・農 職業人口比較(東京15区内)

小木新造著「東京庶民生活史研究」(日本放送出版協会 昭和54年 p50)から

単位:人

明治年度 区名	商業			工業			農業	
	15(1882)年	21(1888)年	33(1900)年	15(1882)年	21(1888)年	33(1900)年	15年・21年	
神田	9,859	4,588	16,956	2,961	5,666	7,675		
日本橋	8,602	13,709	65,403	4,031	1,509	10,504		
芝	5,041	6,198	24,908	5,001	3,380	7,537	76	5
赤坂	3,235	1,832	3,862	1,946	1,312	2,086	277	9
牛込	4,040	1,421	4,602	1,624	510	2,989	139	5
浅草	3,470	9,903	33,803	3,742	7,238	20,199	2	
本所	3,037	6,689	27,342	4,829	4,098	18,235	82	3
15区の合計	76,096	70,633	238,893	54,057	44,338	113,598	896	182

*東京府統計書から作成(農業人口は明治15年と21年のみ)

3. 『時事新報』に登場した芝居広告

社会の構造的変化、人々の暮らしの進展は、新聞広告の内容と密接な結び付きを持っていた。人々の暮らしが少しずつ向上し、休日も取れるようになって、娯楽を求める人々に情報を提供する芝居案内広告が、新聞に掲載されるようになる。『時事新報』の復刻版(龍溪書房)を辿って行くと、歌舞伎、当時の現代劇、翻訳劇などの公演予定が劇場(芝居小屋)の案内広告として、明治時代の後半期(30年以降)の新聞紙面に掲載されるようになり、次第に増えて行ったことが分かる。

明治30(1897)年以降に登場した『時事新報』の芝居案内広告においては、各劇場から単

独で、五月雨式に広告が出稿され掲載されている。

明治 33(1900)年 3 月 11 日には「東京遊覧案内」が登場し、花見茶屋(江東梅園)などの広告と一緒にまさご座の開場告知が出て、さらに明治 33(1900)年 3 月 18 日には歌舞伎座(演目及び市川団十郎休演告知)、明治座、新富座、真砂座(各演目)、花見茶屋(江東梅園)、浅草公園(江川玉乗)の合計 6 件が掲載された。

そして、明治 33 年 3 月 19 日に「東京芝居案内」欄が登場して、ここで芝居広告がまとめられ、案内広告の形での掲載が始まるのである。

この日の「東京芝居案内」欄においては、歌舞伎座一夜討曽我狩場曙 5 幕、傾城阿波鳴門他、明治座一忠孝義筑紫仇討 6 幕、中満來和睦論難波戦記他、新富町 新富座一しらぬひ譚、本朝廿四孝、大和橋、忠臣蔵七段返し、中洲河岸 真砂座一碁太平記白石嘶、春霞鶴五変化、小春治兵衛、さらに明治座は単独広告一忠孝義筑紫仇討 6 幕、中満來和睦論難波戦記他が掲載されている。

この後、明治 33(1900)年から明治 40(1907)年までの『時事新報』に掲載された芝居案内広告の推移を見ると、以下の表 2 になる。

表 2 『時事新報』に掲載された芝居広告(明治 33 年から 40 年まで)の推移

年月	月間広告件数	月間平均広告件数	月間発行ページ数
明治 33 年 1 月	7 件	0.2 件	468 ページ
明治 33 年 3 月 19 日の「東京芝居案内」 掲載開始から 31 日まで(13 日間)	86 件	6.6	156 (13 日間)
明治 33 年 4 月	298	9.9	370
6 月	351	11.7	368
明治 34 年 1 月	407	13.1	422
6 月	281	9.4	360
明治 35 年 1 月	341	11.4	412
6 月	292	9.7	372
明治 36 年 1 月	245	7.9	406
6 月	212	7.1	360
明治 37 年 1 月	254	8.2	396
6 月	218	7.3	360
明治 38 年 1 月	270	8.7	396
3 月	253	8.2	362
6 月	280	9.3	352
明治 39 年 1 月	305	9.8	490
3 月	280	9.0	364
6 月	314	10.5	350
明治 40 年 1 月	266	8.6	404
6 月	364	12.1	376

『時事新報』の「東京芝居案内」欄において、明治 33(1900)年 4 月の月間広告掲載件数は 298 件、明治 34(1901)年 1 月の件数は 407 件まで増加している。これは掲載された広告の件数であって、広告主(劇場)の数ではない。だが、掲載広告件数は明治 36(1903)年 6 月

には212件まで減少している。その後、ふたたび徐々に増加する傾向が見られ、明治40(1907)年6月には364件になっている。なお、この期間の『時事新報』の月間発行ページ数を見ると、明治39(1906)年1月に490ページがあるが、おおむね350ページから400ページの間で推移している。

4. 興行日数と入場者数

『警視庁統計書』より、明治28(1895)年から明治45(1912)年までの劇場数、興行日数、入場者数を見ると、大劇場と小劇場の劇場数の合計は、明治28(1895)年は15軒であるが、その後は大劇場、小劇場共に大きな変動はなく、合計は17～21軒である(表3)⁷⁾。

劇場の年間興行日数について、大劇場、小劇場を足し合わせて見ると、明治30(1897)年が2,929日で最も少なく、明治39(1906)年が最も多く4,385日となっており、概ね3,500日から4,100日の間で推移して、一劇場あたりの年間平均興行日数では184日から215日となる。これは、今日のように劇場が一年を通してほぼ毎日興行しているわけではなく、各劇場は年間で6か月から7か月の興行であったことによる。演目による当り外れも大きく、潤沢な資金を持つ興行主もまだいなかったためだと考えられる。

年間的一幕見入場者を除いた木戸入場者数は、大劇場、小劇場を合わせて見ると、最も多いのが明治29(1896)年の約254万人、最も少ないのが明治36(1903)年の約159万人で、約170万人から約230万人の間で推移しており、明治38(1905)年以降で見ると、毎年ほぼ200万人を超えている。

また、年間の興行日数は年毎に変動していることから、興行日1日あたりの劇場の平均入場者数を割り出すと、大劇場では明治32(1899)年の929人が最も多く、明治36(1903)年の523人が最も少ない。小劇場では、明治28(1895)年の644人が最も多く、明治40(1907)年の349人が最も少ない。大小の劇場を合わせて見ると、最も多いのが明治28(1895)年の685人、最も少ないのが明治36(1903)年の455人で、明治38(1905)年以降で見ると、ほぼ500人から600人の間で推移している。

表3 明治28(1895)年以來明治45(1912)年までの劇場数、興行日数、入場者数
(警視庁統計書から集計)

年 (大劇場、小劇場)	劇場数 合計	興行日数 合計	木戸 入場者数 合計	1 幕見 入場者数 合計	平均入場 者数(興行 日1日毎)	平均1 幕入 場者数(興 行1日毎)
明治28年 (1895年)	(大劇場) 5 (小劇場) 10 (合計) 15	546 2,682 3,228	484,619 1,726,603 2,211,222	289,164 1,080,740 1,369,904	888 644 685	530 403 424
明治29年	(大劇場) 6 (小劇場) 13 (合計) 19	672 3,298 3,970	552,780 1,986,228 2,539,008	369,577 1,256,384 1,625,961	823 602 640	550 381 410
明治30年	(大劇場) 7 (小劇場) 12 (合計) 19	707 2,222 2,929	534,071 1,207,574 1,741,645	402,608 1,263,176 1,665,784	755 543 595	569 568 569
明治32年	(大劇場) 7 (小劇場) 12 (合計) 19	1,060 2,770 3,830	984,244 1,469,540 2,453,784	552,377 1,303,818 1,856,195	929 531 641	521 471 485

明治 34 年	(大劇場)	7	1,226	722,061	406,623	588	332
	(小劇場)	12	2,659	1,257,733	1,105,630	472	416
	(合計)	19	3,885	1,979,794	1,512,253	510	389
明治 36 年	(大劇場)	7	1,010	528,317	388,861	523	385
	(小劇場)	12	2,486	1,061,950	886,282	428	357
	(合計)	19	3,496	1,590,267	1,275,143	455	365
明治 38 年	(大劇場)	6	1,024	700,903	355,349	684	347
	(小劇場)	12	3,083	1,438,961	1,131,909	467	367
	(合計)	18	4,107	2,139,864	1,487,258	521	362
明治 39 年	(大劇場)	6	1,061	766,299	439,262	722	414
	(小劇場)	12	3,324	1,556,081	988,541	468	297
	(合計)	18	4,385	2,322,380	1,427,803	530	326
明治 40 年	(大劇場)	6	1,066	767,101	507,469	720	476
	(小劇場)	11	3,195	1,687,522	1,114,869	349	349
	(合計)	17	4,261	2,454,623	1,622,338	576	381
明治 42 年	(大劇場)	6	966	668,865	377,693	692	391
	(小劇場)	11	3,121	1,440,374	1,023,669	462	328
	(合計)	17	4,087	2,109,239	1,401,362	516	343
明治 45 年	(大劇場)	8	1,377	1,056,719	239,130	767	174
大正元年	(小劇場)	13	2,504	921,609	680,225	368	272
	(合計)	21	3,881	1,978,328	919,355	510	237

- * 明治 29 年の大劇場は一歌舞伎座、明治座、春木座、市村座、川上座、都座の 6 カ所
小劇場は一三崎座、常盤座、真砂座、浅草座、演技座、柳盛座、栄座、新栄座、開盛座、清水座、初音座、關谷座、宮戸座の 13 カ所
- * 明治 39 年の大劇場は一歌舞伎座、明治座、本郷座、市村座、新富座、東京座の 6 カ所
小劇場は一三崎座、常盤座、真砂座、国華座、瓢座、柳盛座、栄座、深川座、開盛座、壽座、演技座、宮戸座の 12 カ所
- * 明治 45 年の大劇場は一帝国劇場、歌舞伎座、明治座、本郷座、市村座、新富座、東京座、有楽座の 8 カ所
小劇場は一三崎座、常盤座、真砂座、蓬萊座、早稲田座、柳盛座、品川座、深川座、開盛座、壽座、演技座、宮戸座、天満座の 13 カ所

5. 芝居の演目と入場料金

明治 33(1900)年 3 月 19 日付『時事新報』の紙面に、「東京芝居案内」が登場した。各劇場の演目と料金を広告原稿から拾ってみると、次のようになる。

- ・明治 33 年 3 月 19 日 「東京芝居案内」が登場、掲載開始
歌舞伎座一夜討曾我狩場曙 5 幕、傾城阿波鳴門他(1 間につき、上等棧敷 7 円 30 銭、高土間 6 円 30 銭、他に敷物代 50 銭、平土間 2 円 95 銭、木戸 1 名 60 銭、敷物なし 1 名大入場[おおいりば] 35 銭、および市川団十郎休演告知も)
新富町 新富座一しらぬひ譚、本朝廿四孝、大和橋、忠臣蔵七段返し
(5 人詰 1 名 上等棧敷 55 銭、同高土間 40 銭、同平土間 19 銭、大入場 10 銭)
- ・明治 35 年 1 月 1 日一「東京芝居案内」
日本橋・中洲 真砂座一山賊芸妓、夜討曾我
(棧敷 4 人詰 1 円 60 銭、高土間同 1 円 20 銭、新高 1 円、土間同 88 銭、前船同 88 銭、中船 60 銭、後船 40 銭、木戸大入場共大人 8 銭、小人 6 銭)
- ・明治 37 年 1 月 1 日一「芝居案内」

木挽町 歌舞伎座—米国女優カーマンセラ嬢電気演芸(舞踏のほか最新式活動写真など)
(1日から8日まで午後1時、午後5時 昼夜2回開演、1等1圓、2等60銭、3等40銭、4等20銭)

本郷座—新派合同演劇 徳富蘆花原作 黒潮7幕

(12月31日から17日まで毎日午後1時開演 通券 1等85銭、2等55銭、3等35銭、4等15銭、木戸銭 布団 下足料なし)

・明治39年1月2日—「芝居案内」

春木町・本郷座—田口掬汀作 伯爵夫人10場

(1等1圓20銭、2等90銭、3等60銭、4等30銭、初日30銭均一 木戸下足料なし)

日本橋・真砂座—三遊亭円朝口述 栗田口霑笛竹8場、偉人東郷大将5場、幕間に東郷大将の活動写真

(裏座敷1名85銭、高土間75銭、平土間65銭、中舟45銭ほか、大入場12銭)

・明治39年1月15日—「芝居案内」

木挽町 歌舞伎座—伽羅先代萩4幕、金寺1幕、村井弦齋作 酒道楽3幕ほか

(座敷1名 敷物共1円50銭、高土間1円30銭、正面座敷1円20銭、平土間1円、中等60銭、松の側40銭、竹の側30銭、三階20銭)

久松町 明治座—一の谷ふたば軍記、隅田川續俳、両面水照月

(座敷1名 上等座敷1円、上等高土間80銭、上等平土間60銭、正面上座敷60銭、正面下座敷30銭、前船35銭、中船25銭、大入場金15銭、初日20銭均一)

劇場での演目は幅広い。歌舞伎として今日でも盛んに演じられるもの、人形浄瑠璃の演目、江戸時代以前からの物語で武士階級の人物を主人公としているもの、忠臣蔵の各段、新内、新派合同演劇と銘打った公演、村井弦齋や芥川龍之介原作の舞台化、新聞や出版物の掲載と連動させたもの、翻訳ものとしてヴェニスの商人、家庭劇として小公子などが演じられている。さらに奇術があり、日露戦争活動写真の上映もあった。

各劇場の入場料金は演目と出演者の顔ぶれで決まったのであろう。最上級の座敷席においては、1名あたり2円近いものから1名50銭クラスの席まであり、かなり幅広い。しかし、最も安い大入場(おおいりば)あるいは5等クラスでは、ほぼ10銭～20銭ほどで、最も高い席と最も安い席の入場料金の差は5倍～10倍ほどである。このような料金設定によって、観客はどの劇場のどの演目でも、自分の懐具合にあわせて席を選び、芝居を楽しむことができたのだろう。

一方で、広告には入場者を増やすための各種の料金設定と工夫があった。初日はどの席でも1名均一20銭あるいは30銭、初日は総幕出揃で半値、均一料金で下足料なし、寶袋の進呈などである。また、新聞や出版物での連載と舞台を連動させた公演は、観客動員を狙ったものと考えられ、これは劇場と新聞社・出版社の双方に利益があったのだろう。

6. まとめ—暮らしの中の人々の楽しみと新聞広告

「半七捕物帳」や「修善寺物語」で知られる作家岡本綺堂は、明治5(1872)年5月東京に生まれた。子供の頃から父に連れられ新富座で団十郎・菊五郎・左団次らの舞台に触れ、長じて「東京日日新聞」に劇評を書き、後に戯曲作家となった。その岡本綺堂が『風俗江戸東京物語』や『ランプの下にて』などで、明治の芝居の世界とそれを楽しむ人々の様子を書き綴っている。

岡本によれば、名義こそ大劇場・小劇場と区別しているが、事実は何も変わらない。小劇場といえども花道を作り、廻り舞台を設けて、団十郎・菊五郎・左団次こそ出ないが、その他の名のある役者は登場する。芝居見物の客種は大小劇場によって幾らか上等・下等はあるものの、ほとんど千差万別で東京府下のあらゆる人種が集まるのである。

近年の流行で紳士と言われる人たち、あるいは銀行・会社員及び商人など、交際を主とする会社の人々は「今度の歌舞伎がよい」とか「この間の明治(座)を観た」などと言わないと幅がきかない風で、最初は必要の為に見るが、そのうち自分も釣り込まれて真の芝居好きにということもある。

芝居見物は男性の道楽で、女性との縁が薄いかと言えばそうではなく、女性の方が芝居熱が高く、芝居を見るよりも俳優を見に行くようだ。また、明治の後期にかけて、見連(けんれん)という一種の団体見物が夥しく増えた。連員(会員)の人数は大きいものは百人余り、小さなものでも2、30人おり、芝居によっては見物の半分になり、大事なお客様である。他には、魚河岸・青物市・吉原・兜町(株)・蛸殻町(米穀)といった有力な連が控えて、芝居の公演に景気を添えてくれた。

新年早々は、どこの家でも主人は年始回りに忙しく、家族は年始客の接待に忙しく、芝居見物に出歩いている暇はない。但し、職人その他の労働階級は、仕事が休みであるから、かえって芝居見物に出る者が多く、それらの客を迎える大劇場は、松の内でも開場していた。また、この時代には藪入りの習慣があり、正月、七月は商家の雇人たちで大いに賑わった。

当時、芝居の興行・演目を知るには、新聞記事による他は、各劇場付の芝居茶屋が馴染み客に配った演目、出演者、劇場名などを書いた芝居番付や、銭湯や理髪店に貼られていた番付で見する方法などがあった。この芝居番付が、集客の有力な手段だった。新聞の芝居案内広告は、芝居番付の延長線上に登場して来たものと考えられる。

明治時代は演劇にも新しい頁が加わった。シェイクスピア、イプセンなどの翻訳劇、壮士芝居、女優の誕生、日清戦争後の戦争劇等々である。これらによって、芝居の魅力をあらたに知った人々も少なくなかった筈である。演劇の世界の新たな波の動きを追いかけるように、新聞の芝居案内広告の登場は、ほぼそのタイミングが重なっている。新聞社は「芝居案内」というもう一つのあらたな広告ソースを掴んだのだ。

芝居見物の楽しみは、人々の日常生活での時間の余裕と、収入によって成り立つものである。近代化を目指した明治時代における職種の多様化と給与生活者の増加は、人々に定

期的な休日と収入の増加をもたらした。あわせて、この時代に生まれて人々が日々接するようになった新聞メディアを通じて、新たな楽しみの情報が広がっていったのである。

註

- 1) 風間道夫「明治期における高等教育の発展と新聞広告」『コミュニケーション科学』34号(2011)
- 2) 風間道夫「明治中期の新聞における会社広告の登場と定着」『コミュニケーション科学』38号(2013)
- 3) 風間道夫「『時事新報』に登場した案内広告」『情報化社会・メディア研究』第10巻(2013)
- 4) 山本武利『近代日本の新聞読者層』（法政大学出版局、1981）
- 5) 青木浩一郎『明治東京庶民の楽しみ』（中央公論新社、2004）p.286
- 6) 小木新造『東京庶民生活史研究』（日本放送出版協会、1979）p.50
- 7) 『警視庁統計書』一劇場興業日数及観客月別（クレス出版、1997）